

メディアが発信してきた

「将棋めし」と「観る将棋ファン」

小笠原輝

1. はじめに

将棋棋士の食事情報、所謂「将棋めし」が最近よく話題になる。その将棋めしを、メディアがどのように発信してきたか、また、将棋ファンがそれをどう受け止めてきたかを考える事が本稿の目的である。

2. 「将棋めし」の始まり

将棋界に食事情報を持ち込んだのは、倉島竹二郎である。一九三二（昭和七年）より『國民新聞』に棋狂子名義で観戦記を書き始めるのだが、最初の観戦記に早速食事情報が出てくる。

「まだ、ほんの子供でしたが、其頃から将棋が飯より好きで、幾晩も夜ふかしを續けたものでした、それでも親父が怖いので晝間仕事だけはやつてゐましたが、或日、餘り睡眠不足が重つたせゐか、たう／＼仕事最中に死にましてね」

「死んだつて？」と、傍で冷麦を啜つてゐた土居八段が、思はず鳩のやうに眼を圓くした「え、何時間か死んでゐたんですよ。やつと蘇つたものゝ、後から理由が知れて、親父から叱られるの、叱られないのつて——それでも将棋だけはどうしてもやめられませんでした」

（中略）

——晝食休憩時間の、ふとした挿話。¹

昼食休憩中のエピソードで、土居八段が冷麦を食べている。それまでの『國民新聞』の将棋欄は、対局者の感想と大崎熊雄八段の講評、といった形で将棋の指手のみで構成されていて、将棋に興味のない読者にとっては無味乾燥のものであった。ところが、棋狂子が観戦記を書き始め、この観戦記の金八段のように細かな人物描写を描いた事で、大変な反響を呼ぶことになる。

棋狂子の観戦記は近來の読み物です。小生は餘り将棋の事は知らず従つて興味もなかつたのですが、今度は知らず／＼讀ま

されました。まるで連載小説のやうに明日が待たれます。筆者は何人にや?大いに敬意を表する次第です。²

将棋を知らない人でも文学のように楽しめるものとして、棋狂子の観戦記が読まれましたようだ。そこで、倉島は次の観戦記において、棋士の人物描写と食事情報を結びつける事を考えた。

溝呂木七段が這入つてきて食事にはどうかと勧めた。小泉六段はてつか井をあるらへた。此處のは減法旨い—といふ。山本七段もひきずられて同じ物を注文した。(中略)てつか井が来ると一と先づ對局を中止する。食事中山本氏は涙をポロ／＼とこぼした。何故つて?あまり山葵がきゝ過ぎてゐたからだ。が、小泉氏は平氣なもので、うまい／＼と食つてゐる。「よう、江戸のお兄いさん!」と黄いろい掛聲がかゝりさうだ。³

「先づ腹拵へ」という題で食事にフォーカスを当てているのに注目したい。内容も、下町の魚屋生まれの小泉六段が山葵を苦にしないという、棋士の特徴を巧く挿んでいるもの。ただ鉄火井を食べたという事ではなく、鉄火井を食べた小泉六段に意味を求めるのが将棋めしであり、倉島が発見した新しい視点であった。倉島は当時をこう振り返っている。

私のねらいは、読者をして勝負の場の空氣を實際に観戦しているように感じさせることであつた。それまでもそうした描写が全然ないではなかつたが、それは刺身のツマ程度で、私のやうにそれに主力を注いだものはあまりなかつた。時には編集部の方から「将棋指しが昼飯になにを食つたか、そんなことまで書く必要はないじゃないか」と横槍の出たこともあつたが、私は「そんなばかな話はない。鰻井を平らげると、筑蕎麦ですませるのでは違う。それでその棋士の嗜好もわかれれば風貌もおのずと感じられ、読者は親しみをますじゃないか」と、反駁して改めようとしなかつた。

幸い、これは読者に受けて将棋欄がおもしろくなつたという投書がくるようになったし、その後あちこちの観戦記で私流の對局描写を見うけるようになった。私は鉾脈の一つをさぐり當てた気がしてうれしかつた。⁴

当時の将棋ファンは新聞の観戦記を通してプロ棋士の将棋を楽しんでいたのだが、そうしたファンにも将棋を観ているやうに感じて欲しい、そのために食事の情報を活用しよう、という意図が倉島にあつたようだ。将棋めしは、その始まりから「将棋を観る」ことを目的としていたようである。実際に、それに

反応した読者投稿も見られる。

棋狂子先生に左の件を希望致します。

現在棋客の出生地、年齢、性格、嗜好、趣味、将棋道に入門の年齢、師匠、出世の道程、記念すべき対局——等、毎日一人づつでも御紹介願へないでせうか？⁵

将棋の盤上の戦いでなく、棋士個人の情報が知りたい、という層の投稿である。菅谷北斗星はこうしたファンはゴシップの興味を将棋に求めているとしているが⁶、盤上で繰り広げられる将棋の対局ではなく、盤側の棋士やその周辺の情報を欲する層は戦前からいたようで⁷、そういう人たちに将棋めしが楽しまれていたようである。名人戦の開幕局⁸や『将棋世界』創刊号⁹には花田長太郎八段や金八段の食事エピソードが入るなど、名人戦や『将棋世界』の歴史は、将棋めしとともに始まっている。

3. 一九七六年名人戦騒動後の、

将棋を観る、コンテンツの発展と将棋めし

将棋めしは戦後食糧難の影響を受けつつも、食糧事情が落

ち着く一九五〇年頃に新しく「食事量が形勢のバロメーター」という概念を得て¹⁰、観戦記や雑誌等で言及されてきた。その情報量が増えるのが一九八〇年代であるが、まず、その情報量の増え方の流れを、将棋を観る、コンテンツの発展とともに見ていきたい。

名人戦が毎日新聞社に移った事に伴い、王将戦はスポーツニッポン社も主催に加わり、王将戦の観戦記や記事は『スポーツニッポン』紙面に掲載されるようになった。その最初の第二七期王将戦の第六局二日目において、一三時より、「観戦と大盤解説会 対局の生観戦」と銘打って無料で観客を集っている。以降関西の対局で対局の生観戦付きの大盤解説会が行われるようになる。そして一九八〇年の第二九期王将戦からは「王将戦二四時」というタイムテーブルを掲載し、以後当欄で食事情報が載るようになった。担当記者である松村久は当時をこう振り返っている。

観客のいない対局室で、タイトルを争う二人は何をしているのかを可能な限り読者に伝えられるように「王将戦二四時間ドキュメント朝・昼・夜」という囲み記事もスタートさせた。

「加藤王将はおやつに明治の板チョコを特注。ペロリと三枚とも平らげた」

「昼食は厚焼きトーストを五枚食べた」

あるいは「大山十五世名人は相手が長考に入るとすぐ控室に現れ、雑談をする。今日は四回だった」

——対局者のやったこと、話したこと、食事の身中……ありとあらゆることを、こと細やかに書いた。

一局を七、八譜に分けて連載の形で載せる通常の観戦記とは違って、勝負のエキスを六十〜八十行にまとめなければならぬ対局翌日紙面の「勝負本記」には、盛り込みきれない両者の動きも何とか網羅したかったからだ。¹¹

倉島と同じく、松村も対局室の空気を読者に伝えるために、食事情報を用いていた事がわかる。

『毎日新聞』紙面の方では、一九八二年三月一六日の夕刊において、「将棋指し¹²の一番長い日」という題で、前日行われた挑戦者決定リーグ最終局の特集記事が井口昭夫・加古昭光両記者によって書かれた。名人挑戦と降級という人生が懸かる所謂「将棋界の一番長い日」をコンテンツ化しようという試みである。翌年の『将棋世界』一九八三年五月号の「名人リーグ最終日 棋士の一番長い日 関西編 関東編」、『将棋マガジン』一九八四年五月号の「名挑戦リーグ最終日 挑戦者は森安八段」などの特集記事を井口・加古が書き、以降最終日の特集記

事が恒例化する。棋士の一日を追うという事で、必然的に食事やおやつ注文の様子に言及された。『週刊将棋』一九八六年三月一九日号の「ザ・ロングゲスト・デー」からは『週刊将棋』が特集記事を引き継ぐ事になり、「将棋界の一番長い日」の食事情報が以降定番となった。

『週刊将棋』は、創刊号である一九八四年一月二五日号の巻頭記事「第三期棋聖戦第三局」の書き出しを、森安秀光棋聖が食べた特製うどんから始めるなど、速報性のある媒体で積極的に食事情報を展開するようになる。この『週刊将棋』創刊の頃から、『毎日新聞』の名人戦観戦記の食事情報も充実してくる。第四二期名人戦第四局観戦記¹²では、江國滋が全体の枠の半分を使い、挑戦者の森安八段と同じ物を注文する谷川名人が挑戦者に同調している様子を見て名人が負けるのではないかと、当時感じた事を「メニユーが告げた」という題で書き残している。第四三期名人戦第一局観戦記¹³では、二日目夕食を中原王将が半分残したのではないかと、というNHKディレクターからの情報を基に井上光晴が取材をし、夕食の松島御膳の全メニユーを一二六文字使って書いている。この第四三期名人戦では第二局を『将棋世界』が密着取材をしており¹⁴、対局前日移動日の昼食から、対局翌日福岡を離れる前の昼食まで、対局時以外の食事情報も網羅して掲載する等、特に食事が注目された名人戦

でもあった。この期は第一局終了後毎日新聞社に勝敗を問い合わせる電話が約七〇〇本入る等ファンの注目も加熱し、翌一九八六年の第四期名人戦第二局では、銀波荘の大盤解説を初めて有料（一五〇〇円）で行い七十余人を集め、昼食休憩前に対局室の見学をさせる等、対局の公開が進んでいく。そして一九八九年の第二期竜王戦第一局では初の終局までの公開対局を行い、NHK衛星放送での生中継も放送。それと同時に『週刊将棋』では、『読売新聞』の小田尚英記者がタイムテーブルを掲載。小田はほぼ全ての昼食情報を記述し、ここにタイトル戦の全食事情報が公開されるスタイルが一九八九年末に誕生した。第四九期名人戦第二局¹⁵では、福井逸治が「対局の二、三日前に食べた物が盤上に花を咲かせる」としてとうとう自宅での食事を取材するまでになり、ここで食事情報は一つのピークを迎える。

一九八〇年代は、将棋を観るコンテンツが発展していったとともに、食事情報の見せ方・取り上げ方も発展していった一〇年であった。そして、関係者やファンの意識も変わった一〇年でもある。

まずは関係者の意識から。当時の『将棋世界』は新春に座談会を掲載しているが、一九八六年一月号で河口俊彦が以下の発言をしている。

河口 僕はね、とにかく将棋が知らない人が読んでも興味を持つことができるような観戦記がほしいと思うね。

（中略）

河口 加古さん、僕は名人戦なんか、酒場や喫茶店なんかでも話題になってほしいわけです。で、観戦記はその話題を提供しなくちゃならないと思うのです。野球ファンが多いと言っても、その大半は、お茶の間でテレビ見てるテレビテレビファンでしょ。で、野球なんかやったことのないのがフォークの握りはどうかとか、カーブはどうかと言うわけでしょ。将棋もそういった能書きが言えるような材料を観戦記で提供してほしいんです。今の観戦記は、ちよつとプロの読みとか権威を押しつけ過ぎですよ。

加古 なるほど、将棋を知らない人に興味を持たせる視点は必要だね。¹⁶

河口が「観る将棋ファン」層に向けて観戦記を書く必要がある、という指摘をし、『毎日新聞』の加古がそれに気付かされる、というもので、この時点では河口の意識は共有されていない。それが、二年後の一九八八年二月号では、「見せる」とい

う事を意識するようになっていいる。

司会 棋界全体の事として、より発展させる企画というか、近い未来で実現させたいような事というのはいないでしょうか。

山田 それに関しては是非言いたい事がありましてね。タイトル戦か、大きな一番を、公開でね、やればと。

河口 この機会に竜王戦でやったらどうですか。タイトルマッチまでは半年以上あることだし、今決めておけば可能だと思っけれどもなあ。なんといつてもファンは生の対局をみたいんだし、お好みの席上対局とは全然迫力が違うもの。

それで、棋士も見られるのを嫌がる時代じゃなくなってきたいるんだから、いい設備もそろっている時代なんだしね。

山田 ともかく真剣勝負を生で見せるということですよ。

河口 興行的に成りたつかどうかは検討するとしても、やらなきゃいけませんよ。世間の関心と呼ぶべきや。

山田 これからは有線TVも使える時代でしょう、一日中将棋の事を放映することも可能な訳ですし、「見せる」事を考えなければね。

河口 その意味では棋士も映像に対しては考え方とか意識を変えて行かなきゃね。素人が気軽に口を出せる雰囲気を作らないと。

(中略)

司会 女性ファンを増やす妙案はないですかね。

河口 それはやはり地道にやっていくしかないんだけど、催し物をやってもアフターケアをしないとね、一回こっきりじゃついでこないよ。

石堂 セールスマンがいらないとね。

山田 それと、女性の大会を開くのも大事だけれど、知らない人に「見せる」という方向を作らないとね。スポーツだってルールを知らないファンが見ることがあるんだから。

河口 こまめなフォローと持続性だね。待っていちやだめだよ。¹⁷

河口が提唱し、『将棋マガジン』の対局日誌等で実践してきた将棋を知らない層への普及が、一〇年かけて関係者間で共有されるようになり、その結果、第二期竜王戦の公開対局に繋がっている。

将棋ファンについても、同じような流れができていいる。観る

将棋ファンと言えるような層が、一九八〇年代に入って『将棋世界』の読者投稿「声の団地」に投稿するようになったのだ。二例紹介したい。

一〇日遅れの将棋世界をここプリンス市でも愛読しております。

もちろん、主人の済んだあとで、棋譜の部分抜きして読むのですから、正確には、将棋人口の内へは入れてもらえない部類に属するでしょう。

(中略)

将棋そのものは、ほとんど知らない私が、これほどまで魅力を感じるようになったのも、主人の影響も有るのですが、倉島竹二郎氏の純文学と断言出来るほどすばらしい観戦記を知ってからなのです。

氏の文章は、元々文学をめざしただけあって、駒と駒の戦いだけに終らず、人生であり、それ自体が独立した名作といっても過言ではないでしょう。言葉の一句一句がその時の風のそよぎ、虫の音、対局者の息づかい、澄み切った目に宿る意志の輝きを著し、その場に居る以上に優雅にと同時に鋭く激しく表現される。¹⁸

かく言う私の将棋は、全く進歩していない。

(中略)

そういうわけで、今は将世を読むとか、テレビ観戦の方が面白い。

棋界はキャラクターが豊富だから、誰が対局し、解説し、文章を書いても、その方の人となりが出ていて楽しめる。

対局場のぴりつと張りつめた空気も好きだ。床の間の生け花、和室のしつらえ、逸品の駒と盤、お茶などのすべてが、棋士の考える風景に溶け込んでいる。日本の文化が凝縮されている感じだ。男の人の着物姿の美しさを再認識したのも、将棋を知ってからだ。

(中略)

将棋のとらえ方は十人十色。勝負だ、いや芸術だ、文化だ、娯楽だ、暇つぶしだと色々あった方が楽しい。幅を持たせることが、普及の第一歩だと思うから。¹⁹

前者では、「棋譜を抜かして読むので将棋人口のうちには入ってもらえない部類に属する」としながら、倉島の描く対局場の様子に魅力を感じている。後者ではもっと明確に、テレビ観戦で観る対局場の様子に魅力を感じている。どちらも将棋の盤面ではなく、将棋を観る事に魅力を感じている。

一九八〇年代までは、将棋を指す人の事を将棋ファンと捉えていた。よって一九八四年の投稿では、今なら観る将棋ファンに分類される女性は、自分自身を将棋ファンと分類していない。ところが、一九九〇年の投稿に入ると、「将棋の楽しみ方は色々あった方が楽しい」と言い切る女性が出てきていて、ファンの間でも将棋を観る事に対する意識が進んでいる事が分かる。一九八〇年代に食事情報が増えたのもそういった関係者の努力の一つで、当時の観る将棋ファン層は将棋めしを楽しみ、倉島ファンの読者投稿はその代表的な例ではないか。

4. インターネット時代の、観る将棋ファンと将棋めし

二〇〇一年頃から、各新聞社のサイトで将棋中継が徐々に始まるようになり、その中で食事情報も取り上げられるようになる。例えば王将戦は第五〇期より現場実況が始まり、第五局一日目には食事写真が掲載されている。二〇〇三年五月に『名人戦棋譜速報』が始まると、青葉記者が食事情報を順位戦にも広げた。二〇〇四年九月二日には青葉記者が対局者と同じ食事注文をして画像を公開し始める。これによって、将棋めしは一つの変化を向かえる。今までのタイトル戦の食事情報や食事写真は、どこか遠くの出来事であったが、将棋会館での対局で食

事写真を公開することによって、千駄ヶ谷に行けば同じ物が食べられるという、将棋めしがより身近なものとなったのである。反響も大きく、二〇〇四年二月一六日には記者投稿されていない対局者の食事情報を求める投稿が出るなど、食事情報を求める声がより強くなる。二〇〇六年九月一五日には、烏記者が出前注文の店名を公開。以前より個別の質問で店名を答えていた事はあったが、この時に初めて店名と注文がセットで提供された。二〇一〇年三月一二日に烏記者が夕食の店名を公開した後は、関東の食事には必ず店名がつくようになり、『名人戦棋譜速報』の食事情報のフォーマットが完成した。

二〇一〇年七月五日に『日本将棋連盟モバイル』が開始されると、『名人戦棋譜速報』と同じく食事情報が提供されるようになる。こうして将棋中継に食事情報があるのが当たり前になった後、二〇一二年四月一日、第七〇期名人戦第一局二日目より、インターネットによる棋戦の完全生中継が始まる（以前にも中継はあったが、タイトル戦の全対局を終局まで生中継するスタイルが始まる）。放送中に対局者がおやつを食べる様子が写り、対局者の食事メニュー、解説者の昼食アンケート（初期は昼食クイズ）等、将棋の対局がよく理解できない層でも簡単に理解できるものとして食事情報が活用され、食事情報が生中継に欠かせないものとして扱われるようになった。

この名人戦中継に影響されたのか、二〇一二年七月一六日(深夜)に日本テレビの「月曜から夜ふかし」で「今気になる話題」として「将棋メシがうまそうに見える件」が紹介される。内容は、タイトル戦でおやつが出ることを紹介し、タイトル戦で注文されたカレーを紹介するというものであった。メディア上で「将棋めし」という単語が出てきて、その情報が消費される時代も始まった。この頃から増えていく観る将棋ファンと食事情報が相乗効果で増えていく。ニコニコ生放送における、昼食休憩中に解説・聞き手が食事写真の公開やタイトル戦のおやつの時間に合わせて行うの「お三時コーナー」といったものは、対局とは関係ないものであるが、観る将棋ファンの棋士を知りたいという需要を満たすものである。そうして対局者や対局者以外の食事情報が出てくる将棋中継を見た人が、食事が面白い、といった理由で興味を持ち観る将棋ファンになった例も散見される。将棋生中継以前は、将棋めしは将棋を観る雰囲気を楽しむためのものであったが、将棋生中継以後は、流れてくる将棋めしがきっかけになって将棋を観るファンも増えてきた、ということになる。二〇一六年七月五日には『コミックフラッパー』にて松本渚のマンガ「将棋めし」が連載開始。この年の一〇月に藤井聡太四段が誕生し、マスコミが藤井四段の情報を求めて殺到。「将棋めし」というワードとともに、一般メディアが食事情報

を取材して記事にするようになってきている。

現在、藤井聡太ブームにより対局者の食事情報が一般メディアにも取り上げられるようになった結果、対局者の食事情報の公開は更に進んでいる。一般メディアが藤井七段の注文をニュースとして流すことにより、藤井七段の対局相手が注文なのであっても個別に取材するケースも出てきた。棋譜中継においても情報公開が進んでいる。リコー杯女流王座戦は第一期からはほぼ全ての対局で中継があるのだが、昨年の第七期で初めて本戦の全食事情報が公開された。今期第八期では二次予選の全対局の食事情報も公開され二、名人戦・順位戦を除くと、予選から本戦・タイトル戦まで全ての対局の食事情報が公開される初めての棋戦となった。

Twitterにおいても、ニコ生公式将棋@nicoshogiが二〇一七年九月一四日から#将棋めしタグで食事情報と食事写真をツイート、アベマTV将棋ch@abematv_shogiは二〇一八年一月二五日から、日本将棋連盟【公式】@shogi_jsは二〇一八年七月一八日より『名人戦棋譜速報』の写真を用いる形で食事情報をツイートしており、今では対局のある日は有料コンテンツに課金をしていない将棋ファンであっても、手軽に将棋めしを楽しめる時代がやってきている。今や、プロの将棋の対局に将棋めしは欠かすことのできないものになっている。

5. おわりに

将棋めしは、将棋ファンが観戦できない対局場を観戦しているように感じさせる目的で誕生し、発展していった。将棋ファンは将棋めしを知ることによって将棋を観ているような体験をし、また、将棋棋士に対して親近感を覚えるツールとして活用してきた。インターネットによる生中継で対局場が観戦できるようになった現在においても、観る将棋ファンが求める情報の一つとして、今もなお将棋ファンに愛され続けている。これからも、プロ棋士の将棋の対局が続く限り、将棋めしは語られていくであろう。

引用・参考文献

- 1 棋狂子「この人を見よ」『國民新聞』一九三三年八月二七日
- 2 『國民新聞』「讀者の聲」一九三三年九月四日
- 3 棋狂子「先づ腹拵へ」『國民新聞』一九三三年九月十一日
- 4 倉島竹二郎『昭和将棋風雲録』講談社、一九八五、一九頁
- 5 『國民新聞』「讀者の聲」一九三三年九月二六日
- 6 菅谷北斗星『菅谷北斗星選集 秘録篇』日本将棋連盟、一九七八、七六頁
- 7 棋狂子「将棋」『文藝春秋』一九三四年九月号、一四一頁

- 8 樋口金信「相縣りの典型」『東京日日新聞』一九三五年七月八日
- 9 『将棋世界』一九三七年創刊号「棋界ナンセンス」六二頁
- 10 三猿子「食欲と優劣」『東京タイムズ』一九五〇年一月九日や、三猿子「名人挑戦者決定戦」『朝日新聞』一九五〇年二月四日が代表例
- 11 松村久「私の観戦記4」『週刊将棋』一九八七年四月二九日
- 12 江國滋「メニユーが告げた」『毎日新聞』一九八四年六月二日
- 13 井上光晴「寄せを誤る谷川」『毎日新聞』一九八五年四月二五日
- 14 『将棋世界』一九八五年六月号「名人戦第二局密着レポート」五八、六一頁
- 15 福井逸治「カツオ対かしわ」『毎日新聞』一九九一年四月二六日
- 16 『将棋世界』一九八六年一月号「痛快座談会 86年は制度改革の年だ!」四二、四三頁
- 17 『将棋世界』一九八八年二月号「新春特別二天企画第二段 辛口座談会」五四、五五頁
- 18 『将棋世界』一九八四年二月号「声の団地」「拝啓倉島竹二郎様」一八二頁
- 19 『将棋世界』一九九〇年五月号「声の団地」「将棋は文化だ 活劇だ」二〇二、二〇三頁

〔将棋めし研究家〕